目次

凡例……3
解説……8
一　春は曙……1
二　比は……5
三　正月一日は……6
四　思はん子を法師になしたらんこそ……20
五　大進生昌が家に……22
六　うへにさぶらふ御猫は……35
七　正月一日、三月三日は……45
八　市は……46
九　淵は……47
一〇　清涼殿の丑寅の隅の……48
一一　すさまじきもの……64
一二　たゆまるるもの……76
一三　人にあなづらるるもの……76
一四　にくきもの……77
一五　心ときめきするもの……85
一六　過ぎにしかた恋しきもの……86
一七　心ゆくもの……88
一八　檳榔毛は……90
一九　菩提といふ寺に……91
二〇　木の花は……92
二一　花の木ならぬは……97
二二　鳥は……102
二三　あてなるもの……109
二四　虫は……110

二五　七月ばかりに、風いたう吹きて……113
二六　にげなきもの……114
二七　細殿に人あまたゐて……116
二八　主殿司こそ……118
二九　をのこは、また随身こそ……119
三〇　猫は……120
三一　若くよろしき男の……121
三二　草は……122
三三　草の花は……125
三四　集は……128
三五　おぼつかなきもの……128
三六　たとしへなきもの……129
三七　ありがたきもの……130
三八　御仏名のまたの日……132
三九　頭の中将の、すずろなるそら言を聞きて……134
四〇　上の御局の御簾の前にて……146
四一　ねたきもの……148
四二　かたはらいたきもの……152
四三　御かたがた、君達、上人など……154
四四　中納言まゐりたまひて……157
四五　二月つごもりごろに……159
四六　はるかなるもの……161
四七　四月のつごもりがたに、初瀬に詣でて……162
四八　冬は……164
四九　むとくなるもの……164
五〇　はしたなきもの……165
五一　関白殿、黒戸より出でさせたまふとて……166
五二　九月ばかり、夜一夜、降り明かしつる雨の……170
五三　七日の日の若菜を……171
五四　五月ばかり、月もなういと暗きに……172
五五　正月十余日のほど、空いと黒う……176
五六　清しと見ゆるもの……179

五七　うつくしきもの……180
五八　人ばへするもの……182
五九　見るにことなることなきものの……184
六〇　むつかしげなるもの……185
六一　とくゆかしきもの……186
六二　心もとなきもの……187
六三　近うて遠きもの……191
六四　遠くて近きもの……192
六五　雪のいと高うはあらで……193
六六　宮にはじめてまゐりたるころ……195
六七　ふと心おとりとかするものは……208
六八　風は……210
六九　野分のまたの日こそ……212
七〇　笛は……215
七一　五月ばかりなどに山里にありく……217
七二　いみじう暑きころ……219
七三　賀茂へまゐる道に……220
七四　八月晦日、太秦にまうづとて……221
七五　五月の菖蒲の……223
七六　よくたきしめたる薫物の……223
七七　月のいと明かきに……224
七八　大きにてよきもの……224
七九　短くてありぬべきもの……225
八〇　御乳母の大輔の命婦……226
八一　清水にこもりたりしに……227
八二　降るものは……228
八三　日は……229
八四　月は……229
八五　星は……230
八六　ただ過ぎに過ぐるもの……230
八七　いみじうきたなきもの……231
八八　せめておそろしきもの……231
八九　たのもしきもの……232
八〇　世のなかになほいと心憂きものは……233
九一　よろづのことよりも情あるこそ……234
九二　人のうへ言ふを腹立つ人こそ……236
九三　人の顔にとりわきてよしと見ゆる所は……237
九四　大蔵卿ばかり……238
九五　うれしきもの……240
九六　節分違へなどして……244
九七　雪のいと高う降りたるを、例ならず……245
九八　見ならひするもの……246
九九　この草子、目に見え……247
一〇〇　左中将……250
語　句　索　引……251
一、清原氏系図……260
二、枕草子関係系図（皇室関係）……261
三、枕草子関係系図（道隆・道長関係）……262
四、平安京図……263
五、大内裏図……264
六、内裏図……265
七、清涼殿図……266

一、春　は　曙

春は曙。[一]やうやう白くなり行く山際[二]、すこしあかりて[三]、紫[四]だちたる雲の細くたなびきたる。

夏は夜。月のころはさらなり。[五]闇もなほ螢[六]の多く飛びちがひたる。また、ただ一つ二つなど、ほのかにうち光りて行くもをかし。[七]雨など降るもをかし。[八]

秋は夕暮。夕日のさして、山の端いと近うなりたるに、烏の寝所へ行くとて、三つ四つ、二つ三つなど飛びいそぐさへあはれなり。[九]まいて雁などのつらねたるが、いと小さく見ゆるは、いとをかし。[十]日入りはてて、風の音、虫の音など、[十一]はたいふべきにあらず。[十二]

冬はつとめて。[十三]雪の降りたるはいふべきにもあらず。霜のいと白きも、またさらでも、いと寒きに、火など急ぎおこして炭もてわたるも、いとつきづきし。[十四]昼になりて、ぬるくゆるびもていけば火桶の火も白き灰がちになりてわろし。[十五]（一段）

通釈　春はあけぼの（がよい）。だんだん白くなってゆく山際が、すこし明るくなって、紫色をした雲が細くたなびいている（のがよい）。

夏は夜（がよい）。月のあるころのよさはいうまでもない。（二十日以後の）月のない闇のころでもやはり螢がたくさん飛びちがっている（のはすばらしい）。また（たくさんではなく）ただ一つ、二つなど（のほたる）が、かすかに光ってとんでゆくのも、こころよいおもむきがある。雨などが降るのもおもしろい。